銀座水族館（七つの海の魚および水産切手）

—35—

三崎出張所　神　原　　勇

カ　ツ　オ

分類　スズキ目　カツオ科

学名　*Katsuwonus Pelamis*

英名　Skip-gack. Bonito

あらゆる漁業の中で，鰹の竿釣ほど壮快かつ豪快なものはないだろう。近年米式巾着網の大型化及発達により旋網船の建造が相次いでいるが，鰹の習性から見れば竿釣漁業が最も適したものと考へられ，漁業の近代化に対応し自動釣機の改善もこれを伸長させた一因となっている。

梅の花が散りあちこちより桜の花だよりがきかれる頃になると，黒潮にのって日本近海に鰹が見られるようになる。活きた鰯を活魚艙に一杯に積み込み，鰹の群（ナブラ）を追う。群が発見されると左舷にそれを見るように接近し活きた餌を撒きながら舷側に誘い込み釣り上げる。このとき撒水ポンプによる放水が行われ，さながら鰹のつくる餌床と同じようなものが形成される。擬餌鉤（バケ）又は活きた鰯の後頭部に釣針をかけたものにより釣りあげるが，釣針には生し（イカシ）がないので釣り上げたものの取り外しは簡単である。鰹が興奮してくると水面に釣針がおちない前に跳びついてくるほど釣り易い。しかしながら誤って釣り逃したりすると折角舷側に付いた鰹の群が四散する事もある。又視覚が可成り発達しているので釣餌の鰯の生死から擬餌鉤の良否まで判別するので，釣り揚げには高度の熟練と技術が要求される。

漁撈長，船長のほか他の漁船にはない，艏乗り（ヘノリ）なる職制があって，一般漁船の甲板長に相当し，鰹船特有の船型である艏の先端即ボースビットの左舷に位置し鰹釣りに従事する。その右舷側には面舵艏乗り（オモカジヘノリ）があり以下順々に技術・熟練度により序列の番号がつく。

鰹の体型は典型的な紡錘形で，同じ外洋性のサバやマグロ類と同型なるも，マグロは肥大し，サバはやせており鰹は丁度この中間にあたる。第２背鰭から離鰭にかけて濃紫色の斜めの横帯があり，死後速やかに色があせてくるので鮮度の判別の指標となる。腹側には青黒色の太めの４本の縦帯が胸鰭から尾柄にかけて見られ，その上方には短い縦帯が４～５本あって尾柄部迄は届かず第２背鰭後方に終る。これらの縦帯は生きているときはあまりはっきりせず，釣針にかかったような興奮したとき及死後硬直時には明瞭に認められるが個体により一様ではない。

鰹の習性について次のような特性がある。

1　産卵の場所は従来ばくぜんと南方水域と考へられてきたが，薩南海域で漁獲されたものの卵巣を調査の結果産卵間近である事が認められ，マグロ，カジキの胃内容物から鰹の稚魚が可成り発見されているので，この近海で産卵が行われているものと考へられる。

2　北，北東風に対しては餌付きが悪く，南，南西風は鰹日和といわれる程浮上も良く，捕食動作も活潑である。降雨の際は浮上，補食とも鈍くなり，降雨に入る直前の餌付きは良好である。

3　清澄なる水帯を好んで回遊し沖合性が強い。濁水を嫌う傾向がつよく，伊豆七島より犬吠崎に向う鰹の群が利根川の流れに対し急拠針路を変え沖へと向う。

4　音響に対して鈍感で，船の航走する音で一時船を離れるが間もなく浮上する。この音の問題は帆船より機船への転換の時期の最大の関心事であった。

5　害敵に対し恐怖心，警戒心がつよく，特にクロカワカジキを恐れる事おびただしい。夜間運動が緩漫になるためメカジキに捕食されることもある。

6　5～6ノットの海潮流にも良く体を支え或は溯上するが，風に対しては弱く常に風下へと遊泳する。運動力が大きく且又絶えず遊泳しているので，酸素の要求量も多く，止水帯に入る事はまれである。

カツオ

分類　スズキ目　カツオ科

学名　Katsuwonus pelamis

英名　Skipjack , bonito

全世界ノ暖海ニ分布スル．日本ヘハ春季南洋カラ黒潮ニ乗ッテ北上シ，晩夏ニハ北海道附近ニ達スル．秋季南下スルトキハ沖合ノ中層ヲ游泳スル．一般ニ生キタイワシヲ撒餌ニシテ釣リ上ゲル外，旋網，鮪ノ延縄ニテモ漁獲サレル。生キテイルモノハ縞ガナク白銀色デ興奮シテイルトキハ横縞ト体色ガ変ッテスル。死後アラワレル縞ハ縦縞デアル。体長ハ生息水域ニヨリ異カリ一般ニ70～80cmデアル．

英領バージン諸島　-1962-

英領バージン諸島　-1966-

英領バージン諸島　-1964-

サモア　-1972-

スリランカ　-1972

日本　-1966-

中華民国　-1965-

日本　-1966-